

「観光ビジネスコース」新設記念講演

人を創り、まちを興し、国を立てる現代の観光

—九州国際大学における観光ビジネスコース新設に寄せて—

高 田 公 理

(仏教大学教授)

日本の将来——醜い衰退か、美しい成熟か

九州国際大学に観光ビジネスコースが新設される機会に、記念講演にお招きいただき、大変ありがとうございます。私は大学では、理学部に所属して、バイオをちょっとかじりました。つまり、もとは理科系だったのですが、卒業後、少しずつ人間や社会に興味が移って、現在は社会学部に所属しています。

本日のテーマは、「人を創り、まちを興し、国を立てる現代の観光」です。

観光というと、パリのエッフェル塔やニューヨークの自由の女神などを思い出す人が多いのではないかと思います。しかし、いうまでもなく、ほかにも様々な話題があります。そのことを、いろんな図像を使いながら、話を進めさせていただきます。

さて、現代の日本には、あんまり明るい話題がありません。1年間に3万人の人が自殺する。勘定すると15分に1人の割合で亡くなっていることになります。私がここで1時間ほど話をさせていただく間にも4、5人の人



略 歴

1944年生まれ。京大理学部卒。シンクタンクCDI主任研究員、

武庫川女子大教授などを経て09年から仏教社会学部教授。学術博士。

専門は情報文明学、観光文明学など。「ものがたり観光行動学会」の立ち上げ人でもある。著書には「語り合うにつぼんの知恵」「につぼんの知恵」

「なぜ『ただの水』が売れるのか：嗜好品の文化論」「自動車と人間の百年史」「酒場の社会学」など多数。

が自殺する。そういう暗い国になってしまっているわけです。

これまで日本の社会は非常に元気でした。しかし最近、政治家にも、ぴりっとした人が出てきません。へたをすると日本は、このまま醜い衰退を歩んでいくのかもしれない。むろん、今なお経済は、それなりに豊かです。だから、快い生活を目指すことも可能です。そういった両面を持つ時代に、私たちは暮らしているようです。

とはいえ、これから経済が一層成長することは期待できません。低成長経済のもとで、どのように内需を拡大していくのか。どうすれば、面白くて楽しい生活を維持しながら、経済を回していくことができるのでしょうか。

その際に、従来通り、アメリカに言われたら、なんでもその通りのことをしてしまうアメリカの属国に甘んじるのか。それとも自律的な国としての誇りと活力を取り戻すのか。あるいは今日、東京は、ずいぶん栄えているようですが、地方は衰退する一方です。その地方の復権をどのように可能にするのか。そういった課題があろうかと思えます。

「観光立国推進法」の制定とそれに基づく政策展開

こういう時期に観光を核とする地域再生を国の礎としようとする試みが始まりました。少し前に、5年間ほど内閣総理大臣をやった小泉純一郎という首相がいました。あんまり立派なことはやりませんでしたが、観光に関してだけはちょっとだけいいことをした。2003年に観光立国懇談会を作り、「観光立国宣言」をしました。これからは観光で国を立てて行こうというわけです。

さらに2006年には「観光立国推進基本法」という法律を作り、2008年には、そのために国土交通省所管の観光庁を新設しました。観光を盛んにしていこうというわけです。

では、現代に於ける観光とは一体何なのか。平たく言うと、観光とは「楽しみを目的とする旅行」ということでしょう。日本を代表する国語辞典である

『広辞苑』には、「他の土地を観察すること。視察すること、その風光などを見物すること」と書いてあります。でも、これだけではちょっと分かりにくい。そこで観光政策審議会は1995年に、こういうふうに記しました。「余暇時間中に日常生活圏を離れて行うさまざまな活動」——ちょっと普段の生活場所を離れて、どこかへ行ってみようというわけです。

そこで何をするかというと、自然や人や文化とふれあい、学び、遊びなどをめざすということになります。私の友人のひとりで、これを見事な一言で言った人物がいます。

「移動を伴う好奇心の充足」（白幡洋三郎・国際日本文化研究センター教授）

つまり、旅行すれば、「これは何か」「あれは何か」と考える。そして「面白いな、きれいやな」と、好奇心が満たされるというわけです。

では、この観光という言葉は、いつごろから日本で使われるようになったのか。答は大正時代ですね。ツーリズムという英語の訳語として使われはじめたようです。ただ、1960年ごろまでは観光よりむしろ、遊山や遊覧、漫遊や行楽などという言葉が使われていました。お隣の中国では、今も旅游、遊覧という、別の言葉が使われています。

それに、政府が1年に1回発行している観光白書では、「宿泊旅行」を「観光」「兼観光」「家事・帰省」「業務」「その他」に分類しています。

そこでつぎに、これまで観光が、どんなイメージで語られて来たのかを考えてみます。すると、だいたい団体で、ありきたりの観光地をぐるっと回る。夜は温泉と宴会で、どんちゃん騒ぎをする。まあ皆さん、楽しそうにやっておられたようですが、その後は、おしきせの土産物を買って家に帰る。そういうイメージが強かったように思います。

これは、海外旅行の場合もあまり変わりません。パリでエッフェル塔を見る。アメリカで自由の女神を見る。観光は、単なる物見遊山、つまり遊びだと考えられてきたようです。

変化する観光のイメージとその経済効果

ところが、最近になって観光のイメージが大きく変化しはじめました。端的にいうと、遊びとしての観光の周辺で、実に莫大なお金が動いていることが、はっきりと分かってきたわけです。

世界の観光の市場規模には驚くべきものがあります。その状況を調べて報告書を作っている団体、世界観光機関（UNWTO）の2年前のデータですが、国際観光客到着数、つまりは世界中の国々に外国からやって来る観光客の数をすべて合計すると、9億2181万人になります。この数値は、前年に比べて2%近く増加しています。そして、同じUNWTOの予測によりますと、2020年までに16億人に増加するだろうといわれています。

つぎに、それに伴う国際観光収入が、現段階で9444億ドルです。日本円に換算すると約70兆円になります。日本政府の今年の予算が90兆円くらいですから、それに近い70兆円もお金を、世界中の人が観光のために使っていることになります。

これは巨大産業だというほかない。さらに、旅行に行くと、ホテルに泊まり、レストランでご飯も食べます。これら、関連産業の市場規模が、世界旅行産業会議（WTTC）の推計によると、5兆5000億ドル、つまり約500兆円です。これは日本人の全員が1年間、必死になって稼ぎだすGDP（国内総生産）に匹敵します。そのくらい莫大なお金が、世界中の観光に関連して動いています。

この金額は、世界の国々の国内総生産、つまり世界中の人が1年間に働いて稼ぎだすお金の1割くらいに当たります。こうなると当然、大学でも観光ビジネスをきちんと研究し、かつ学生たちに教育しなければいけないということになるはずです。

そういうわけで観光は、おそらく21世紀の人類社会の基幹産業、つまりは人類社会を支える一番大事な産業になるだろうと思われます。

「観光は 21 世紀の基幹産業になる」（ハーマン・カーン）

ところで、このことは今になって分かったことではありません。実は私は、現在から 25 年ばかり前の 1980 年代なかばに「観光学が重要だ」と考えるようになりました。以来、少し観光や観光学に関心を持って、いろんなことを調べたりしてまいりました。

ところが、世界にはカンのいい人がいるんですね。

「観光産業は 21 世紀の基幹産業のひとつになる」

そういう予言を 1970 年代、今から 40 年前にした人がいます。ハーマン・カーンという未来学者が、その人です。そういうが予測をきちんと本に書いているのですね。で、「やっぱり勉強せなあかん」と、1980 年代半ばに思わされました。

じゃあ、なぜ彼はこんなことを言い出したのか。ちゃんと根拠があったようです。当時、すでに世界中の国際観光客数の推移を示すデータがあったのですが、その数値が 1970 年ごろに 1 億人を突破しているんです。当時の世界の人口はまだ 50 億人くらいでした。

で、国際観光客数の推移をみると、その数値が 1955 年ごろから増え始めています。ただし、当時の国際観光客数は世界中で 2500 万人くらいでした。それが 1970 年ごろに 1 億人を突破した。それを見てカーンは、先の予測を試みたわけです。

それから 40 年たった 2010 年現在の数値は 10 億人です。その間に約 40 倍に増加した。その過程の 1970 年、その数値が 1 億人になった頃にハーマン・カーンは、「これは大きな変化の前兆だぞ」と気づいたようなんですね。

こういうのを「初期微動への感受性」と呼ぶことができるでしょう。それは、変化の時代を生きる学生さんにとっても非常に重要な能力だと思います。

この初期微動というのは、もとは地震の最初にやってくる、がたがたと揺れる「縦波」のことです。これを感知すると、その 10 秒後ぐらいに、ゆっさゆっ

さと大揺れする「横波」の来ることを察知できます。

これと似たことが時代の変化にもあてはまる。時代の変化の「初期微動」が捉えられれば、その後にくる「大きな変化」が、ある程度、予測できるんですね。ハーマン・カーンは、そういうことのできた人だったわけです。

さあ、そこで現代の世界で ——といっても、1999年のデータですが——一番よく売れる品物は自動車です。だけど、その購入による金銭消費よりも、国際観光のために使われるお金の総額のほうが大きい。そういうことが20世紀末に起こっています。それは21世紀という時代に向けての「初期微動」だと考えてよかろうと思います。

現代社会に観光がもたらす経済的なインパクト

じゃあ、そんな時代に日本はどうなるのか。日本人海外旅行者数と訪日外国人旅行者数の推移のグラフを見てみましょう。

今の若い学生さんなら10万円くらい小遣いがたまったら海外旅行ができますね。いや、関釜フェリーで韓国へ行けば、3万円くらいで2、3泊の海外旅行ができます。

ところが、私が大学に入学した1963年には、そんな自由はありませんでした。不要不急の海外旅行が禁止されていたからです。つまり、外国でお金を稼いで来るのはよろしい。外国で日本のためになる勉強してくるのはよろしい。だけど、それ以外の旅行は、日本の外貨を減らすので駄目だというわけです。

それがようやく1964年、日本の経済が豊かになってきた結果、海外旅行の自由化が実現しました。今から数えると46年前。今の学生さんにとっては大昔の話です。

その初年の海外旅行者数は、わずか14万人でした。それから26年、1990年には、その数が1000万人に達します。つまり、36年間に、約70倍に増加したわけです。日本の工業化が成功し、その生産物を海外に輸出してドルを

稼いだ結果、そのドルを使って日本人が世界中の国々への観光の旅に出かけられるようになったわけです。

その後も海外旅行者数は増加し続け、現在は 1500 万人前後で推移しています。毎年、複数回の海外旅行に出かける人がいるので、偏りはありますが、押し並べていうと 8 人に 1 人くらいが海外旅行に出かけていることになります。

ところが、じゃあ外国から日本に、どれほどの観光客がやってきているのか。調べてみると、出て行く日本人が 1500 万人に対して、入ってくる外国人は 800 万人程度——簡単にいうと、出て行く日本人 2 人に対して、入ってくる外国人は 1 人程度だということになります。

これを、外貨を稼ぐ貿易にあてはめて考えてみると、日本人が外国に行くと、お金を使ってサービスや商品を買うわけですから、これは「輸入」だということになる。他方、外国に観光客は日本でサービスや商品を買ってくれるわけですから、こちらが「輸出」になりますね。とすると、工業製品に関する限り、日本は輸出でお金を稼いでいます。しかし、観光に関しては「輸入超過」、もっぱら、貿易で稼いだお金を、外国で消費しているということになるろうかと思います。

つまり、外国人観光客の数を増やさない限り、日本は観光でお金を稼ぐことができないのです。だから政府は、その数をまずはなんとか 1000 万人にまで増やしたいと考えています。するとその結果、日本の収入が 10 兆円くらい増えて、観光収入の総額が 65 兆円程度まで増えます。この金額は、ざっと 450 兆円前後の日本の GNP の 14 ～ 15% に達します。

それだけじゃない。当然、彼らが宿泊するホテル、買い物をする商店、彼らをもてなす観光案内など、雇用が増えます。その数が 60 万人くらいだと推定されています。こうなると、現在すでに観光関連産業に従事している人の数と合計して 528 万人の雇用が確保できる。これは日本の全従業員の 8.2% 程度にあたるというわけです。

さて、そこで 2006 年の訪日外国人観光客数を参照します。その数値は 733

万人です。じゃあ、これら日本を訪れる観光客は、どんな国から来ているのでしょうか。調べてみると、一番多いのは韓国です。次いで台湾、その次が中国です。少し前までアメリカが3位だったのですが、中国の経済発展の結果、中国人観光客が着実に増えるようになりました。

しかも、ここで注目すべきは、最も増加の著しいのが中国人だという点です。不思議はありません。来年ぐらいには中国の経済力が、一位のアメリカについて二位になり、日本は三位に転落します。ただ、中国の人口は日本の10倍以上ですから、人口1人当たりでは日本の10分の1程度です。という意味では、世上の大騒ぎは過剰な反応だという気がします。とはいえ、せっかく日本に来てくれるわけですから、大いに稼がせてもらえばいい。これが、いわば観光立国推進基本計画の考え方ということになります。

そこで観光庁は、2010年を目標に、観光振興の計画目標を立てたわけです。それによると、①訪日外国人を1000万人に増やす。②日本人の海外旅行者を2000万人に増やす。③日本国内の観光産業の市場規模を30兆円以上に増やす。④4年ばかり前に年間2.8泊程度だった国内観光旅行者の宿泊数を4泊に増やす。そして、⑤国際会議の開催数を50%以上増やす——というわけです。これが達成されたかどうか、まだ結果は出ていません。

しかし今年、観光庁は新しい計画目標を立てました。中期的に訪日外国人旅行者を3000万人にまで増やそうというのが、その骨子です。これだけの外国人が日本にやってくれば、交通機関を利用したり、ホテルに泊まったり、物を買ったり、飲食店で食事をしたり……日本経済はかなり潤うことになります。

『易経』に記された「観光」の原義と現代

そこでもう一度、改めて「観光とは何か」を考えてみましょう。

こういうとき、最初に調べるべきは「観光」という言葉が、どのような歴史を辿ってきたかという問題です。とくに、この言葉の「初出」を調べる必要が

あります。

すると、「観光」という言葉の初出は、約 3500 年前、中国の周の時代に記された古典の『易経』にあることが分かります。それは、当時の占いの本でした。現代日本でも岩波文庫の一冊になっていますので、容易に入手できます。

じゃあ「占い」とは何か。とくに女子学生は占いが好きでしょう？ それは簡単にいうと、「彼との仲はうまく行くか」「結婚は、いつごろできるか」など、不確かな未来の運勢を教えてくれるわけですね。ただ、太古の中国では、個人の未来ではなくて、国の未来を予測するために占いが用いられていました。

現代という時代にあっては、未来の出来事が、ある程度、科学的に未来を予測できます。天気予報だって、一種の未来予測なんですから……。ところが、大昔の中国に、そんな科学はありませんでした。とくに国の未来なんて分かりようがない。そんなときには、神さまにおうかがいを立てるほかありません。そんな仕事をしていたのが、『易経』を参考にして未来を占う占い師と王様だったわけです。

で、その『易経』に「観光」という言葉が出てきます。つまり、「国の光を観る。もって王に賓（ひん）たるに利あり。賓たらんことを尚（こいねがう）なり」。

むつかしいですね。これを、簡単な現代日本語で言うと、

「一国の王たる者は、諸国をめぐって『国の光』を見てこなければならない。そうすると、王の知識も心も豊かになり、立派な王様になれる」

ということでしょうか。

ここで注意すべきは、中国語の「観」という言葉です。そこには「みる」という意味と「しめす」という意味があるようです。「売買」という言葉にも似通っていますね。

じゃあ「国の光」とは何なのか。それは、それぞれの国の、豊かな自然、そこで営まれている人々の快適な暮らし、それに支えられて育まれる優れた文化などを意味します。そういうものに接して、心身ともに豊かになった王は、今度は自分の国に戻って、そこから「国の光」を発することができるようだろうとい

うわけです。

このように観光は昔、王様の仕事だったのです。その観光が、現代の豊かな社会では、私たち庶民の楽しみになりました。同時に、観光の旅に出かけると、何か新しい知識や知恵が身につきます。こうなると、その知恵を普通の生活に活かしてみようということにもなる。たとえばイタリア旅行をした若い女性が、「イタ飯ってカッコええな、おいしいな、健康にもいいな」というので、その真似をし始める。結果、すこし食生活が豊かになるというわけです。

岩倉使節団とイザベラ・バードを比べてみる

そこで、少し時代をさかのぼってみると、今から 150 年ぐらい前の明治時代、当時の政治家や高級官僚たちが、同じことを試みていたんですね。なかで最も有名なのが、岩倉具視を団長とする特命全権大使岩倉米欧回覧使節団です。岩倉具視は、少し前まで流通していた 500 円札に肖像が印刷されていたので、年配の方なら、御存知だと思います。で、彼のほかに随員として、伊藤博文、木戸孝允、大久保利通などが一緒に出かけました。いずれも当時の日本のエリートたちばかりです。

この使節団が日本を出発したのは、明治初年、1871 年のことです。彼らは 1 年 9 カ月、到来したばかりの黒船に乗ってアメリカ、イギリス、フランス、ドイツなど、米欧の先進 12 カ国を訪れました。

そして帰国後、彼らがまとめた記録が『特命全権大使米欧回覧実記』という報告書になりました。で、その表紙をめくると、最初のページに「観光」と記してある。この書物も、岩波文庫として公刊されていますので、容易に手に入れることができます。

これを参照すると、彼らの目的がアメリカやヨーロッパの先進的な近代文明を視察することにあつたことが分かります。つまり、それが彼らの見たかった欧米諸国の「国の光」だったわけで、それを勉強するために出かけたというこ

とになります。実際、なかを見ると、ニューヨークの高架鉄道、ストックホルムの製鉄所、ブリュッセルのガラス工場など、先端の科学技術を駆使した都市施設の見聞記がたくさん記されています。

というのも、当時の日本は未だ非常に貧しく、かつ遅れていた。それは、直前の江戸時代に日本が鎖国をしていたからでもあります。だから、ややオーバーに「夢中二二千年ヲ経過シタリ」などを書いてある。そうした省察を踏まえて、「これから日本は『礼の国』から『富の国』になるのだ」と言い放っているんですね。

ところで、同じころに日本にやって来たイギリス人がいます。イザベラ・バード (Isabella Lucy Bird) という女性です。

この時代のイギリスは、産業化、工業化が進んで、都市の生活環境は大変なことになっていた。石炭を燃やした煙が出るし、労働者は貧しい生活を強いられるし、その結果、アルコール依存の男女が増えるし、非常にひどいことになっていました。当時の版画に「ジン横町」というのがありますが、そこには、赤ちゃんをほっぽらかして、酒に酔っぱらっている母親の姿が描かれたりしています。

そんなイギリスから日本にやってきたイザベラ・バードは、日本の米欧使節団とはまったく正反対の、東北地方や北海道などの田舎を回り、『日本奥地紀行』という本を書きます。その本の中で彼女は、「東北地方は日本のアルカディアだ」と言っています。

ここでいう「アルカディア」とは、古代ギリシャの牧歌的な楽園のことです。緑豊かな当時の東北地方という、いわば日本の米欧使節団とは、まったく正反対の性質を帯びた場所を見て、「ああ、ええとこやな」と思って帰国したわけです。

それから、およそ 150 年が経ちました。ここで日本とイギリスの、典型となるような風景写真を比較してみると、面白いことに気づかされます。日本のそれは、ビルが林立したり、石油コンビナートが広がっていたりする都市の風

景、それに比べるとイギリスのそれは、花と緑があふれる、いかにも田園的な庭園の風景……やや手前勝手な比較ではありますが、そんなことになるように思います。

だからこそ、現代日本の若い女性たちはたくさん、イギリスへガーデニングを学ぶために出かけるわけでしょう？ こうした庭の文化がイギリスで盛んになった理由の一つは、実はイサベラ・バードの旅行記がたくさん読まれたことにあるんですね。それと対照的な日本の都市風景は、明らかに『米欧回覧実記』を参考にして達成された日本の近代的工業化の結果にほかならないということになります。

こうしてみると、150年前の日本人とイギリス人の観光の結果が、今日の両国で実現されているのだという見方もできるのではないのでしょうか。

「経済一流、政治は二流」だが「文化は一流」

そこで話を、現在の日本に戻します。少し前までは「経済一流、政治は二流」などと言われていました。最近では「経済二流、政治は三流」なのかもしれません。

ところが、ここにきて日本の「文化」の潜在力は、あらためて高く評価されているようです。その象徴の一つが「モッタイナイ」という価値観です。

もともと、最近の日本人は結構、平気でもったいないことをする傾向があります。でも、「もったいない」という言葉は、まだ生きています。

この言葉が指し示す価値観に、大きく心を動かされた人に、ワンガリ・マータイさんという人がいます。ケニアの環境保護活動家で、アフリカ人女性として初めて、2004年にノーベ平和賞を受賞した人です。この人がいま「モッタイナイ」という標語と、それが意味するところを世界中に広めようと活動しています。

こうした価値観の背景に、長い間にわたって日本人が育んできた自然観、さらに広い文化があることは疑いを容れません。

それだけじゃない。最近は豆腐、すし、日本酒、和食レストランなどが、世界的に人気を高めています。世界中の和食レストランを合計すると2万5000軒を数えるようです。こうした日本文化に対する諸外国、特に欧米、中でもアメリカの関心は非常に高いわけです。

欧米だけじゃない。世界経済を根底から揺さぶった2008年のリーマンショック以来、本国の日本でも、ひたすら金銭ばかりを追求するのはまずいのではないかという気分が広がっているようです。例えば2008年あたりを境に、四国88か所の霊場を巡礼する人、日本人の心の重要な部分を象徴する伊勢神宮に参拝する人などが、若い人を含め、最近は急速に増えています。

こうした趨勢のなかで、伊勢神宮には中国や韓国やロシアの観光客が訪問するようになったという話を聞いたこともあります。かつてなら、第二次大戦の際の日本の行動を支えた思想的な支柱として、彼らが忌み嫌った場所を、彼らが訪れるようになったというのは注目すべき事実だという気がするのですが、いかがでしょうか。

そうかと思うと、世界のファッションの都といっていいフランスのパリで、やや「はしたないな」とも思われそうですが、日本の若い女性のファッションが「カワイイ」と高い人気を誇っています。そのパリのファッションを象徴するブランドの一つだったルイ・ヴィトンが、日本人アーティストの村上隆さんを起用して「カワイイ」デザインの商品を開発したりもしています。

このように日本の文化は最近、国の内外で熱い注目を浴びはじめています。

日本の「観光競争力」への評価は悲劇的に低い

ところが、残念なことに、毎年スイスで開催される「ダボス会議」の主催団体である世界経済フォーラムが公開している「世界旅行観光競争力レポート」での日本の順位は非常に低いんですね。2009年版レポートによる、1位がスイスで、以下、オーストリア、ドイツ、フランス、カナダ、スペイン、スエー

デンときて、日本は25位です。

細かく見ると、「安全」に関して日本が84位になっていたりしていて、必ずしも信頼度は高くなさそうです。だって、日本の治安の良さは世界一とっていいというのが一般の理解でしょう？ だから、どうでもいいようなものですが、確かに総合すると、競争力が高いとはいえないようです。

これを何とかしないと、経済成長の著しいアジア諸国、つまり中国、台湾、韓国、東南アジアが工業と貿易で世界経済に進出しつつある時代に、日本の経済的な競争力そのものにかげりが出てくる可能性があります。というのも、工業製品の貿易における日本の黒字幅が徐々に減少しているからです。

不思議はありません。人件費の高い日本の工業製品に比べて、たとえば中国の製品は、ずっと安いわけでしょう？ とくにテレビやビデオなど、圧倒的に中国製品が強い。で、その貿易で稼いだお金で中国人が海外旅行に出かけます。むろん貧しい階層も少なくありませんが、何しろ総人口が14億人です。その10%が海外旅行をしたとしても1億4000万人でしょう？ 2007年には4000万の中国人が海外旅行に出かけているんですね。このトレンドを伸ばすと、2015年ごろには、その数が1億になるだろうと予測されています。

こうなると、いよいよ日本が観光の面での競争力を強化しないと、たいへんなことになりかねません。だって、日本に観光魅力がなければ、日本は観光地としてパッシング、つまり誰もやってきてくれなくなるからです。

首都圏一極集中の問題と「低炭素社会」をめざす試み

そこで、つぎに現代日本における観光と関わる課題について考えてみます。

まず、日本にやって来る外国人観光客の多くは東京から日本に入ります。そして、富士山を眺め、1日くらいは古い日本文化を集積した京都に足を伸ばし、再び東京に戻って、東京ディズニーリゾートや秋葉原、男性なら風俗街で遊んで出国するんですね。

こうした彼らの行動の背景には、政治や経済をはじめ、さまざまな意味での首都圏一極集中があります。ここで首都圏とは東京はじめ、埼玉、千葉、神奈川あたりを指すのですが、その結果、それ以外の地方は、さまざまな領域で着実に衰退の方向を歩むことにならざるをえないわけです。

じゃあ、それがどの程度ひどいことになっているのか。まず、首都圏への人口集中には驚きます。第二次大戦直後の1945年には、総人口の13%にあたる900万人が首都圏に集中していたのが、2005年には3500万人。総人口の27%が首都圏に集中するようになりました。つぎに、人口1人あたりの所得を見ると、東京のそれは、最も所得の少ない沖縄の2.2倍に達しています。しかも沖縄は、皆さんご存じのとおり、広大な米軍基地を押し付けられて、生活環境としては最悪の場所が少なくないわけです。

くわえて日本中で、いわゆる階層間の格差、つまり金持ちとそうでない人との格差が広がり始めた。それを示す指標の一つが相対的貧困率です。これは社会の構成員の可処分所得の中間値の半分しか所得がない人たちの比率で表します。その数値が、日本では14.9%に達するようになった。この数値の高さは、OECD加盟国中、メキシコ、トルコ、アメリカについて世界第4位に位置です。こうした格差が、15分ごとに1人の日本人が自殺するという、今どきの世相の要因の一つを形成しているのだと思います。

もう一つ大きい課題は、2050年をめざす低炭素社会の構築ということです。そのためにどうするか。まあ、今後の日本人の暮らし方として、2つの方向性が想定できます。

第一の方向は、従来と同様、効率的な都市に住み、ハイテク製品を生産することで低炭素社会をめざす方向です。でも、これだけでは課題の達成はできません。

今一つの方向は、田園地帯を中心に自然を大切にしつつ、均衡ある国土整備を実現しようというものです。そのためには、経済発展より生活重視、技術進歩より規制緩和、農林水産業やモノづくり産業の復権、住民参加に支えられた

活気ある地域づくりなどの課題に対する取り組みが必要となってきます。

こうした二つの方向性を留保しながら、ある人々は都市に住みつつ、週末は田園地帯で過ごすといった、いわゆる「マルチ・ハビテーション」をめざしたりもするはずです。そんな、いくつもの可能性を追求する必要があるわけです。

こうした生活のスタイルは、すでに EU 諸国で実践され始めています。そこでの目標は、従来型の経済成長追求ではなくて、快適で楽しい生活の追求なんです。

そういえば、「GNP（国民総生産）」ではなくて、「GNH」を高めることこそが目標なのだと考えて、国づくりを進めている国がアジアにあります。インドと中国にはさまれた小国のブータンです。この国は、経済を大きくすることをめざす代わりに「GNH」、つまり「Gross National Happiness（国民総幸福）」の増大をめざそうとしています。詳細は話せませんが、日本の将来を考える際にも、非常に興味深い試みだと思います。

現代日本に兆す新しい旅と観光のかたちを京都で眺める

ブータンほど極端な道を歩むのはむづかしいとしても、実は 1990 年代から 21 世紀にかけては、日本でも新しい生き方を感じさせる観光行動が兆しています。

まず、従来の観光の典型は、①団体で、②ありきたりの名所・旧跡を周遊し、③お仕着せの土産を買って帰る、といった他律的なものでした。それに対して最近では、①家族や関心と同じくする少人数のグループで、②自分たちの関心に沿った計画を立て、③滞在型を含めて、ゆっくり旅を楽しむ、いわば自律的な観光行動が目立ちはじめました。

こうなると当然、旅と観光の形も「十人十色」……旅先で茶碗をひねろうという人もおれば、わざわざ軍艦島を訪れようという人も出てきます。むろん、じっくり森や海辺にじっくり腰を据えて、動物や植物などの自然観察にふける

うという人もいるでしょうし、土地ごとの文化を深く学ぼうという人も出てくることになるでしょう。

そうした旅や観光の新しい動向を象徴する、お伊勢さんや四国八十八箇所霊場巡りなどについては、先に触れたとおりです。あるいは、私が生まれ育った京都でも、従来にはなかった旅や観光の新しい動向が目立ちます。

ひと昔前なら、金閣寺や清水寺が大賑わいしたものです。むろん今も、これらの観光スポットの人气が低下したわけではありません。ただ、従来は必ずしも多くの観光客に顧みられなかった場所の人气が高まっています。たとえば錦市場の八百屋さんが経営している町家のレストランなどは、その一例です。そこで伝来の京野菜の料理を食べるのが楽しいというわけです。

あるいは、ウナギの寝床のように奥に細長い京町家の坪庭や簾をつぶさに観察する。蒸し暑い京都の夏の盛りに、ちょっと坪庭に水をまくと、そこに極小の高気圧ができて、さーっと涼しい風が吹く——そういう京都の暮らしの知恵を心に残すこともできます。これって、電気を大量に使う空調機の使用よりも、まどろっこしくはありますが、低炭素社会にも適応しうる、ちょっとカッコイイ、いわば一種の生活の革新ですね。

そんな京都の文化の「光」に出合って、普段の暮らしに活かす。文字通り「観光の本義」にのっとった旅や観光の新しい形が、最近の京都の街では観察できるようです。

旅と観光を盛んにするための条件整備を進めよう

とはいえ、こうした新しい型の旅や観光が、じゃあ、急速に人々の間に広がっていくかという、そういうことはなさそうです。先に触れた階層間格差の拡大など、旅と観光の阻害要因が少なくないからです。

それに最近では、若い世代の旅や観光への関心は確実に低下しています。この10年間、若者の旅は10%ぐらい減少しています。

その背景には、今なお企業社会にあつては有給休暇が取りづらいといった問題があります。例えば、有給休暇の消化率を国ごとに比較してみると、日本のそれは、フランス、イタリア、スペインなどと比べて半分以下です。とくに宿泊を伴う旅と観光には、長期休暇が不可欠です。だから「有給休暇完全取得法」はじめ「未消化の有給休暇を企業が買い取る制度」「旅行減税制度」「旅学の推進」などを、今後は国家や地方自治体の施策として積極的に推進していく必要があると思います。

こういうことを考えますと、このたび新たに九州国際大学に観光ビジネスコースができるのは、まことに時機を得た試みであるといえます。ぜひ若い学生の皆さんには、そこに進学し、積極的に旅や観光に出かけ、さまざまな知恵や知識を学んでほしいものです。

ただ、旅や観光から学ぶには、それに必要な資質を身につける必要がある。そうした要請に応えることを目的の一つとして、2010年、私たちは「ものがたり観光行動学会」を設立しました。

その基本的な考え方は、簡単なものです。それを簡単にいうと、旅や観光で何かを見たり聞いたり体験したりしたら、だれかにそのこと伝えたいと思うでしょう？ それは、おしゃべりを通してでもいい。写真や絵、詩歌、紀行文、旅先でのものづくり……なんでもいいのですが、旅や観光での体験に根ざしつつ、それぞれの人が面白さや楽しさや珍しさを見つけるまなざしを持って、なにがしかの表現活動を試みようというものです。

そうした表現活動の成果を、一般に「ものがたり」と名づけてみます。すると、それが表現者自身の暮らしを豊かにしたり、新しい名所を生み出したりすると、私たちは考えています。早い話が、かつて松尾芭蕉は東北地方の立石寺を訪れ、そこで「閑かきや岩にしみ入る蟬の声」という句を詠みました。その瞬間に立石寺は、新しい名所に生まれ変わったと考えていいからです。

とすれば、べつだん芭蕉に限らず、誰もが新しい名所を生み出すきっかけをつくれると考えることができます。そこで発見した知恵や思いを、普段の暮ら

しに活かすこともできるのではないのでしょうか。ですから、九州国際大学に新たにできる観光ビジネスコースの学生さんたちは、ぜひ「ものがたり観光行動学会」に入って、自分自身を新たにし、訪れた場所を新しい名所に変えるような試みに挑戦してほしいものだと思います。

「若者、よそ者、大馬鹿者」が魅力ある地域を創り出す

一方、ある地域に住んでいる人たちが、その地域を自分たちの知恵とアイデアと力で魅力あるものに変えていく試みも、九州にはたくさんあります。

たとえば大分県大山町です。大分県の西の端にある町で、現在は日田市大山町になっています。ここは一時期、日本中に広がった「一村一品」運動の発祥の地です。人口は4000人ですが、この40年間、農家戸数がほとんど変化していません。

で、その耕地面積は農家1戸当たり4反ですから、これでは米を作っても食っていけない、はずなんです。ところが農家1戸あたりの農業所得は、驚いたことに550万円。日本の農家の平均的な農業所得が200万円程度ですから、その2倍以上を稼ぎだしていることになります。

じゃあ、めっちゃめっちゃ働いて忙しいのかというと、そうでもない。農業労働は毎週28時間で、週休3日です。それで、人口の70%がパスポートを持っているんですね。この数値は、日本の自治体で最高の普及率なのだそうです。実際、若者を中心に余暇活動や文化活動も非常に盛んです。

なぜ、こんなことができるのか。人々が考えに考え抜いて、非常に付加価値の高い農業経営やっているからです。そのための知恵やアイデアを誰が出すのかと聞いたことがあります。答は「若者、よそ者、大馬鹿者」だということです。

「若者」が、出かけた先や、この町を訪問した「よそ者」の刺激を受けて、新しいアイデアを出す。すると、それを村の大人のなかの「大馬鹿者」が支援して実行に移していく。簡単にいうと、そういうサイクルを回転させることで、

付加価値の高い農業の仕方を見つけるのだといいます。という意味で、ここの「大馬鹿者」は「常識にとらわれない利口者」を意味しているわけです。

私は、この大山町を、何度も訪れているのですが、こうした試みが始まったのは50年ばかりも昔のことです。詳細は、皆さんで調べていただくとして、大まかなことを言いますと、1960年代、ちょうどサントリーが「トリスを飲んでハワイへ行こう」というコマーシャルを放映していたところに、大山町とその農協が力を合わせて「ウメ・クリ植えてハワイへ行こう」という運動を始めるわけです。田んぼをつぶしてウメやクリなどの果樹栽培を始めたんですね。

これには、農林省が激怒したそうです。だって当時はまだ「米を栽培する田んぼ」こそ「国の礎」にほかならなかったんですから……。ところが、やがて1970年代には、その農林省の先導で、全国の減反が進んでいきます。それを、米では食えないと考えた大山町の人々は先取りして、果樹栽培に転換したわけです。

その開始に当たって、当時の農協理事長で町長でもあった人物は、「農協職員の給与を2倍にする」と言い放ち、それを早い時期に実現します。げんに1967年には約束通り、最初のハワイ旅行を実現し、それに参加した人々は、新しい農作物を持ち帰って、それ以後の営農に巧みに活用することになります。

以後、さまざまな新しい試みが行なわれました。たとえば1972年には、エノキダケ栽培に着手しています。1980年には、まだ日本では珍しかったハーブ栽培を始めています。その背景には、2000年の日本人の食生活を予測する研究プロジェクトがあったそうです。さらに1990年には、農産品の二次加工を開始します。ちょっと形の悪いイチゴなんかをジャムに加工して売ろうというわけです。

ただ、こうした二次加工をすれば、瓶入りのジャムという最終商品ができあがる。ならば、それを自分たちの手で販売する施設まで作ってしまうおうというので、大山町の入口に「木の花ガルテン」という大規模な商業施設を作りました。

開業当初の1990年には、商品の出品者がわずか210人で年間売上額も

6800 万円に過ぎなかったのですが、13 年後の 2003 年には、2342 人が自分たちの作った品物を出荷し、売上額も 13 億 6800 万円にまで増えました。その木の花ガルテンで買い物をするために、大山町を訪れる人が年間 190 万人に上るようにもなりました。で、その訪問者を歓迎しようと、大山町の入口の山の斜面には、春になるとツツジの花で描いた、ピンクの「大山」という文字が浮かび上がるといった具合です。

つまり今日では、人口 4000 人の山間部の町を、毎年 190 万の人が訪れる。いわば大山町は、旅や観光の領域でも成功を収めつつあるわけです。そして最近、博多あたりから来る人が多いというので、大山町は、日田市や福岡市、大分市や別府市に合計 7 店舗の「木の花ガルテン」を展開し、その繁栄を謳歌しています。

北九州に潜在する近代工業遺産の魅力を活かす

大山町の事例を、そのまま北九州市にあてはめることはできません。でも、北九州とその周辺にも、磨けば光る資源はたくさんあります。

じつは 1988 年、J R 九州の依頼で、私は乗客の減った旧地域の魅力づくりのプロジェクトに参加したことがあります。その前年、1987 年の国鉄の分割民営化の結果、J R 九州の経営が危機に瀕していたころの話です。

北九州を中心に、いろんな場所を訪れているうちに、現在も保存されている、1901 年に建造された東田の溶鉱炉が目に入ったんですね。その瞬間、「あ、これは現代芸術そのものや」という印象を持ちました。スペースワールドの入口のスペースシャトルより、ずっと迫力があって、かつ美しいと思われました。

溶鉱炉だけではありません。長崎の軍艦島にまで足を伸ばし、ここでも、その迫力と美しさに打たれ、軍艦島を観光開発しようなどという提案をしたんですね。ただ、ちょっと時期が早すぎたんでしょう。当時そのアイデアはお蔵入

りになってしまいました。それを最近、長崎市を中心にして、新しい観光地として高く評価し始めているわけでしょう？

そんなことを考えていた矢先、ようやく2007年に北九州イノベーションギャラリーができました。北九州の発展を支えてきた近代工業、それが生み出したさまざまな遺跡や遺物に新しい光を当てようというわけです。

そういえば門司港の周辺で、これより早い時期に、赤レンガ造りの建築などが楽しめる観光開発がなされてきました。こうした資産を活かせば、北九州市内にも、さまざまな魅力ある観光地が生み出されると思います。

そこで話が飛躍しますが、世界的に有名な観光地として、日本人にも非常に人気の高い、たとえばイタリアのベネチアという町ですね。あれは明らかに、コロンブス以前の香料貿易で栄えた都市の遺産だといっていいと思います。それを活かして、彼らは、世界中から莫大な数の観光客を呼び寄せているわけです。

同じような試みは、イギリスにもあります。世界最初の近代的な製鉄所が誕生したイギリス内陸部のラグビーという町の近くに、非常に美しい鉄の橋「アイアン・ブリッジ」があって、有名な観光名所になっています。

これらの事例から学びつつ、日本も本格的に近代工業の遺産や遺物を活かす観光を考えるべき時代に来ています。しかも、こうした試みは、若い人や子供たちに対する教育として、非常に重要な価値を秘めているのではないのでしょうか。

というのも、現代における最先端技術は、コンピュータですよね。これも重要です。でも、困ったことに、いくらコンピュータに習熟しても、原因と結果を結びつける「因果関係」という、非常に重要な物事の仕組みが見えてこない。それは、なかで何が起きているかが分からないブラックボックスであるわけです。

それだけじゃない。ちょっと古いミシンなどを見ますと、私は「美しいな」と思われます。その好き嫌いは、人ごとに異なりますが、そうした美しさの

感覚は、いわば技術的な制約のもと、ひたすら機能を考えることで、というよりは、機能に制約されることで生み出された形の美しさだという気がします。現代という時代は、ブラックボックスとしてのコンピュータを多用することで、そうした制約から自由な美しい造形が可能になった反面、なんだか捉えどころのない造形が闊歩しているという気がしないでもありません。

それに、因果関係から自由になることが、むしろ好ましい面も持つのですが、逆に困った問題を引き起こすことにもなる。死んだ虫を見て「電池が切れた」という子供たちの感性と「死がどんなものか知りたかった」と幼児の首をちょん切ることとの間には、もしかすると、何か関係があるかもしれないという気がするわけです。

とまあ、いろんなことを申しあげましたが、これからの時代は、人を造り、まちを興し、その結果、国が立っていく。地域と町の魅力を見つけ、創りだし、広く世間に伝え、巧みに訪問客をもてなす。共に喜び、共に楽しむ。そのことによって地域と町の魅力が増大し、訪問客が増える。こうなると、人々の誇りが高まる。観光が新しい産業として地域経済を支える役割を果たす。その過程で、すぐれた人材が輩出し、地域とまちの誇りと活力が蘇る。そして、より広く大きく「につぼんの観光立国」が実現する。

そういう役割を、ぜひ九州国際大学観光ビジネスコースには果たしてもらいたいと思います。というわけで、ひとことで言えば、「まちを興し、国を立てる観光を創る人」を育成することが、これからの九州国際大学観光ビジネスコースの課題なのだと思います。本日は、そんな思いを話させていただいた次第です。ご静聴、ありがとうございました。

（2010年12月6日、九州国際大学での講演）